

〔事例研究Ⅰ〕

登校拒否

—心理療法的接近の研究—

研究第6部 森 脇 要

小山 一 宏

木 村 猛 (仮名)

昭和43年9月19日 生

昭和51年6月17日 受付

当時7歳9か月で、某小学校の2年生である。

主訴 精神身体症 (登校拒否)

特に学校に行くのを嫌がるという事はないが、学校に行くと、給食を中心として嘔吐が始まり、これが段々ひどくなり、脱水状態になり、危険なので入院という事になり、結局学校を休む。幾日かの入院治療でよくなり、学校に行くと、又再発する。

エピソードは、2月1回、3月は風疹のあと1回、4月は2回、5月は3回、6月は2回。しかも6月の2回目は、「又病気が起こると、嫌だから家には帰らず、ずっと病院にいる」と言って帰りがたなくなる。

ここで愛育病院の方から、次のような見解で心理治療に廻されて来た。

病院の診断はアセトシ血性嘔吐症 (頻繁発作)。経過は51年2月初より頻繁の嘔吐、元気がぐったりする状態。入院して点滴療法にて約一週間で治癒し、別人のようになる。このようなアセトシ血性嘔吐の状態が月1回の割合で起こり、4月には2回、5月には3回とだんだん頻繁にならている。

前回入院 (5月11日—17日) も同様の症状で同様の経過であったが、学校に出ると疲れ易いと訴えていたため、退院後も一週間学校を休ませたとする。その間自宅で全く普通に生活していたようである。5月24日、初めて学校に通わせたら昼より吐き気、嘔吐を認め、今回の入院となった。

病院の担当医は、この頻発性のアセトシ血性嘔吐の原因として

(1) 器質的疾患 (2) 学校の問題 (3) 家庭の問題を考へ

(1) に関しては脳波、X—P電解質等検査して、現在のところ病変はみあたらないが尚検査中。

(2)、(3)については、学校にも、家庭環境にも問題がありそうなので心理学的な検査や処置も必要でないかと、我々の方に廻されて来た。

最近の病気の状態をみると、6月11日に入院し、6月22日に退院している。入院の初め3日間は点滴、そのあとゆっくり回復、2日後食欲、身体の調子は普段と変わりなくなり、22日に退院している。

併し6月23日、星頃だるそうになり (発病の前駆的徴候である)、夜吐き、食事をうけつけない。6月24日夕方入院、当時は水も受けつけない状態。

このように最近の頻度は多くなり、入院、点滴3—4日、元気になり一週間で退院、帰宅して7日—10日で入院のくり返しである。しかも最近では、家より病院の方がよいといい、退院したがなくなった (病院でいるとすぐ手当が受けられるから)。

家族関係

父親 42歳 大学卒 自営

母親 35歳 高校卒

兄 小学校6年生

本人 小学校2年生

祖母 祖父の妹で財産をもっており、父親は2歳の時からこの叔母に育てられ、養子になっている。

出生状況と発育歴

出世状況や発育歴に問題はなく、ごく普通の出産で、出生時体重は3,255gで発育も順調である。

主訴

この事例は、病院から、心理的な原因が関係しているのではないかと我々の方に廻って来たので、親として特別に訴えたい事はなかった。嘔吐が始まったのは学校で特に給食の場面であった。本児は一般に食事に執着のある子（所謂くいたがり屋）で、何時も沢山たべたがる。本児が給食のときかまずにのみ込んで3杯おかわりをしたので、先生から「大丈夫、自家中毒になるわよ」と注意をうけた。その晩自家中毒になったと母親は言う。又牛乳をたてつけに2本のみ「冷たい牛乳そんなにのむとお腹こわすよ」と先生に言われ、その日も自家中毒になったと母親は言う。これが自家中毒の原因であるかどうかは、まだはっきりしないが、本児の「くいたがり屋」は情動障害のあることを暗示している。又始めは学校に行きたがらないとか、登校を拒否するという強い徴候はなかったが、嘔吐が学校の事件を契機として起こり易く、又あとで説明するが、学校に行かなくてよいというと、非常に元気になるなどを考えると或は学校恐怖症の一つの形態と考えられるかも知れない。

面接

子どもと母親と面接して一番我々に印象づけられた事は、2人の話があまりに一致しない事である。特に家族についての認知が全然異っているのに驚かされた。

1. 本児の先生、友人、家族に関する認知

本児によると、彼の周囲の人は、まさに理想的人物ばかりである。彼が本当にそのように認知しているのか（無意識に認知を歪めているとしても）或は、彼の本当の認知を語らず、何等かの理由で嘘をついているのか、明らかでないが、彼をとりまく人々とはとて角涙の出る程理想的な人々ばかりである。

先生はやさしい先生です。こわい時は本当にこわいけれど、学校は面白い。

友人とは縄とびやボール投げなどして遊びます。

父はやさしい時もこわい時もあるけど、先生と同じみたい。お兄さんと僕をかわいがる。

母は怒るときはあんまりないけれど、やさしい時もあんまりありません。

兄は僕と喧嘩するとき自分（兄）からがかって来て喧嘩になります。叱られるのはお兄さん、僕も叱られる事もあります。お兄さん、やさしいところもあります。祖母は僕等が喧嘩しているときに、お兄ちゃんの方を叱って僕は叱られなくて、叱られる事もあるけれどもお

兄さんは何回も叱られる。

2. 母親の話

母親の話は子どもの話と非常に違っているところが多い。母親と祖母との関係はあまりよくない。日常生活の経費は父の収入でまかなわれているが、臨時費（例えばこの子の入院費等）は祖母の負担になる。しかも、父はこの祖母に2歳から養育されているという事もあり、両親ともこの祖母に頭があがらない。母親はこれを非常に不満に思っている。

本児に聞くと、祖母は、自分らが喧嘩したときに、主として叱られるのは兄だといっているが、母親によると、祖母は兄を偏愛し、兄が父に叱られると、必ず祖母がかばう。2人共に欲しがる物も、兄だけに買い与え、次の時は、本児といい乍らまた兄に与えたりする。お菓子も大きいからと兄に大きい方を与える。母は祖母が兄を偏愛することに非常に不満をもっている。

本児は母親に「何故お母さんは、おばあちゃんとお父さんの言うことをきくのか」と不満をもらした事もある。本人は祖母、兄に対してブーッとふくれるだけで、不満を我慢して母の顔をみていると母親は報告する。

本児は非常に負けず嫌いであるが、又一方がまんする性格である。よい子にならねばと思っているようである。祖母は行儀が大変にきびしいので、本児は兄とはり合って祖母に挨拶をする。

負けず嫌いで願望欲求もつよく、勝負事は、自分が勝つまでは止めない。又ずるをしてでも勝とうとする。或は敗ける事がわかってくると、次からは決してやらない。負けたときは言い訳をし、又相手に難くせをつける。

母親は盛に祖母の偏愛をとくが、本児に聞くと、祖母が一番好きで、次は母、父、兄の順序という。

祖母は、兄の方を気に入っており、母親は本児の方を気に入っており、子どもを中にして祖母と母とが、はり合っているというのが事実なのかも知れない。

祖母と父は、本児が、やたらに食べるので食事毎に肥満児になるからと食事制限をしたり、嘔まずに食べるな、等と口うるさく言っている。これなどは嘔吐に対する一つの刺激（引きがね）の作用をしているかも知れない。

知能検査（鈴木ビネー）の結果

C.A. 7歳9か月、M.A. 8歳6か月、I.Q. 110
もっとよく出来るかも知れないが、少なくとも知的には問題のない事が明らかである。

テスト中の態度は、落着いてテストを受けているが、自信がないと答えなし、固くなり、緊張している。

性格検査 C.A.T. の結果は、画面叙述が多く、あまり自己を投射しない。これは自己防衛的であると言えるかも知れぬ。登場人物は家族よりも友人が多く、兄が全然現れないのは特徴的である。しかし彼のペーソナリティは C.A.T. に明確に出ていたとは言えない。診断

以上のような結果から、本児は、強い欲求不満をもちていると考えられる。欲求不満の現れが、食いたがりであり、強い負けずらいである。しかし、この不満を外に表現することが許されないで、強く抑圧している。本児の描画は「紙の隅に小さな絵」という特徴をもっているが、これもその一つの表現である。この心的メカニズムの適当な解決がないので、心身症的な解決の方法をとったのではないかと考えられる。しかも一度嘔吐が始まると、これの期待不安が高まって、これが又嘔吐の引きがねとして働いている。しかし結局入院し、完全に受容され、外からの圧迫から逃れる事が出来ると、心身症は治るというメカニズムをくり返していると思われる。

処置

まず本児に心理治療を施して、情動の歪みを解決しようとして、週一回治療を開始した。又家庭が非常に複雑なので、母親にカウンセリングを与え(月2回)、母親を通じて家庭の人間関係を改善しようとした。心理治療には小山が当り、母親のカウンセリングには森脇が当たった。

経過

本児は7月7日から始まり、10月27日、治療完了まで15回(1週1回、約1時間)(夏休中は2回休み)の治療を受けたわけで、母親はその半数のカウンセリングを受けたことになる。

カウンセリングが始まってまもなくから、(勿論初めの頃の心理治療は入院のままである。)家族関係に若干の変化が見え始めた。

母の言葉によれば、祖母は、子どもの再三の入院で、しかも原因の一つは家族関係にあると知って、この子にいろいろ気を使っており、口うるさく言わないようにしている。又兄だけの偏愛をやめるようにしていると言う。

父は母の話を聞き、自分も責任を感じ、本人が家族間で不利な立場になると、手助けをしてやったり、今までは運動的な遊びは全然してやらなかったが、それ以来自転車、キャッチボールなど一生懸命に相手になってやっている。

祖母と母の関係も大分改善されて来た。本児の病気が2人の共通の悩みとなるため、2人の間に協力関係が出来て来た。

第2回の治療が終わった頃から、本児にいくらかの変化が現れ始めた。まず退院した事である。それまでは、病気が再発すると嫌だから病院にずっといたいと言っていたのに先週の木曜日に急に家に帰りたいと自分で先生に言って、金曜日に退院した。

家に帰ってからは大変乱暴な言葉を使うようになった。てまえーしねえかー一といった調子。母にも兄にも言う。兄は弟にあんな言葉を使わせてよいかと母に訴えるという。

又家の中でも大変あばれるようになった。

祖母は、こんな乱暴な事を許しておくに今に本当の不良になりますよと嫌がるが、又一方子どもが少しぐらいあばれでも病気になるよりはましだと前程怒らなくなる。

本児は又治療中も、家庭でも始めは画用紙の端に小さな絵を描いていたが、近頃は画用紙半分程度の絵を書くようになった。

祖母と父母とはこの子の病気についていろいろ話し合い、風通しが少しよくなった。

セラピストの先生と遊ぶのが好きで、他のプログラムと治療の日が重なると治療の先生の方に来るといって、治療により喜びをもつようになる。

学校のアスレに母と一緒に連れて行っており、少し泳げるようになった。クロール、平泳ぎ、バックなど5米程は泳げるようになる。

祖母は、もう子どもは手におえないと手を引いた形になり、今迄になかった事であるが旅行も親子4人で出来るようになった。

母の報告によると、次のような事が起こった。

数日前母方の祖母の家に(バスや電車に乗って1時間ぐらい離れた処)一人で遊びに行くと言うので一人でやってみた。(この家で発病そのまま入院して、野球の道具をここにあげてあり、これをとりに行くのが第一目的)。祖母との連絡がわるく、祖母は本児が午後から来ると思い買物に出かけた。本児が祖母の家に着いたときは誰もいない。本児は戸をガタガタとゆずって開け、無人の家に入り、家に電話をかけて来た。「祖母の家に着いたが誰もいないが大丈夫、私が留守番をしているから両親は大急ぎで来るに及ばない」。ずい分しっかりして来たと思う。

第4回を終って、8月の前半が終わった頃(夏休み前半は治療は休み)本児の行動は、かなり改変されている。

先ず全体に元気になって来たことが目立つ。しかし、嘔吐に対する期待不安は全然なくなったとは言えない。しかし今までとちがって予防的に自分の食欲を管理することが出来るようになってきている。たべすぎないように努力し、又病気になるといけないから、これは明日にするという調子である。体重は20Kから23.4Kに増加し、よくたべるので、まもなく病気の前の25Kに回復しそうだと思はれて観測している。

父親と海水浴にゆき、浮袋をつけてであるが父親と一緒に岸からずっと離れたヨットのところまで泳いで行った。不安はない。

体重も退院の時は20Kであったが今は24.4K、すぐ25Kになると思う、よくたべるからと母親は言っている。

一方少し前から漢法の医者にもかかっている、何か薬を飲んでおり、甘いものは禁止されている。それでおやつは専ら、せんべいばかりたべている。

その他最近の進歩をあげれば、絵も大きな絵を描くようになり、友人と喧嘩も出来るようになってきている。

併し尚消極的なところもあり、友人が誘いに来ても、まだ遠出は出来ず、自分の家か、その近くで遊んでいる。

本児が段々元気になり、特別に配慮されているのを知ると今度は兄の方がお母さんは弟ばかり可愛がると嫉妬をやり始めた。それで兄は昆虫などの蒐集が好きなので、この方に必要なものを与えて、不満を補償するよう努力しているという。

9月1日から学校が始まった。1日は勿論母親と一緒に

でないと学校には行けないので、母親と一緒に学校に行った。一週間は母親がついて行った。初めの日是一日中教室についていた。それから段々と一緒に教室にいる時間を減らし、国語など不得手な授業時間だけ一緒にいた。一週間ぐらいたつと、本児の方から帰れというので、付添を止めた。

給食も心配したが2学期から何の抵抗もなくなっている。

大分元気になって来たので、そろそろ治療を終結する用意をしてもよいのでないかと考え始めた。

又治療を始めて一月程は、病院の先生方に会いにゆくことに抵抗があり、元気になった姿を見せて来なさいといっても、もう少したつてからと言っていた。しかし、9月に入ると、先生のところに報告にゆき、病院の先生や看護婦さんと会うのもたのしみになり抵抗がなくなった。

9月の終りになると、本児は非常に元気になった。10月3日に運動会があり、競走に出て一等をとった。友人と喧嘩もする。よく眠りよくたべ、嘔吐に対する期待不安は全然ない。目方も5Kも増えて、殆ど心配はなくなった。

10月13日のカウンセリングの日の母親の報告によると、遊びに行く範囲も広くなり、おそくまで遊んで来る。兄の方が少しやきもち気味である。もう治療は終結にしてもよいが本児が治療をよろこび、治療者に会うことを非常に楽しみにしているので、終結の準備に2回のセッションを用い、10月27日で終結とした。

その後もずっと元気で生活をしている。